

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長名
(公 印 省 略)

病害虫発生予察技術情報について
令和3年度病害虫発生予察技術情報第5号を公表したので送付します。

令和3年度病害虫発生予察技術情報第5号

野菜類・花き類におけるミカンキイロアザミウマの防除対策について

ミカンキイロアザミウマは平成 30 年(2018 年)2月に沖縄本島の施設栽培キュウリで初確認され、その後の調査でも、その他の野菜類・花き類から発生・定着が確認されています。本種は吸汁による被害だけでなくウイルス病も媒介するので、防除対策を徹底しましょう。

1 形態・生態

- (1) 形態: 雌成虫(図1)は、体長約 1.5mm。体色は明黄色～褐色と変異が大きく、腹部に褐色斑を伴う黄色型もある。低温条件下で褐色型が多くなる。雄成虫は、体長約 1.1mm で明黄色のみ。
- (2) 生態: 卵は葉や花弁などの組織内に1個ずつ産みつけられる。1雌成虫当たりの産卵数は 150～300 個。幼虫は花弁、新葉などに生息し、これらを吸汁加害する。2齢を経過した後、地表に移動し、土中や、落葉中で蛹化する。成虫になると再び花弁、新芽、新葉に移動し、加害する。発育期間は、キクでは 15℃で約 34 日、20℃で約 19 日、25℃で約 12 日及び 30℃で約 9.5 日。成虫の寿命は 37～99 日。発育零点は 9.5℃。
- (3) 寄主植物: 本種の寄主範囲は極めて広く、主な寄主植物は以下のとおりである。下線は沖縄県で寄生が確認された植物。
 - ・野菜類: ピーマン、トマト、ナス、キュウリ、ヘチマ、スイカ、メロン、イチゴ、アスパラガス、キャベツ、レタス、ホウレンソウなど。
 - ・花き類: キク、トルコギキョウ、カラー、マツバボタン、インパチェンス、ガーベラ、バラ、カーネーション、アイリス、シクラメン、ゼラニウム、ヤグルマソウ、など多数。
 - ・雑草: アワユキセンダングサなど多数。
- (4) 本種による野菜・花き類への直接の被害は成虫及び幼虫の吸汁による被害である。加害されると、野菜類では、葉にかすり状及び白斑状の食害痕、果実に奇形や褐変、退色が生じる(図2)。花き類では開花後の暗色花弁には白色条が、明色花弁には褐色条が生じ、商品価値がなくなる(図3)。
- (5) 本種はトマト黄化えそウイルス(TSWV)、インパチェンスえそ斑点ウイルス(INSV)及びキク茎えそウイルス(CSNV)の主な媒介虫である。

2 防除対策上注意すべき事項

- (1) 苗を導入する時は本種の寄生や食害痕がないか確認する。育苗時に防虫ネットを張るなどして、本種の寄生を防ぐ。
- (2) 施設では出入口や側窓を 0.6mm 以下のネット等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。
- (3) 多発すると防除が困難になるので、花や葉への被害が無いかよく観察し、早期発見・防除に努める。
- (4) ほ場周辺の雑草は本種の発生源になるため開花前に除去する。特に、本種は花粉の摂食により増殖力が増すことから、オオバナノセンダングサ(別名:タチアワユキセンダングサ、アワユキセンダングサ、オオバナセンダングサ)(図4)などの雑草は開花

- 前に除草する。
- (5) 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避け、散布後には必ず効果を確認する。
 - (6) 栽培終了後のほ場が発生源にならないよう、すみやかに残さ処理を行う。
 - (7) 本種が発生した施設ほ場では、本種の分散を防ぐため、栽培終了後、蒸し込み処理を行う。



図1 ミカンキロアザミウマ 図2 キュウリの葉の白斑状の被害(矢印)



図3 花のかすり症状の被害(左から、小ギク(矢印)、輪ギク)

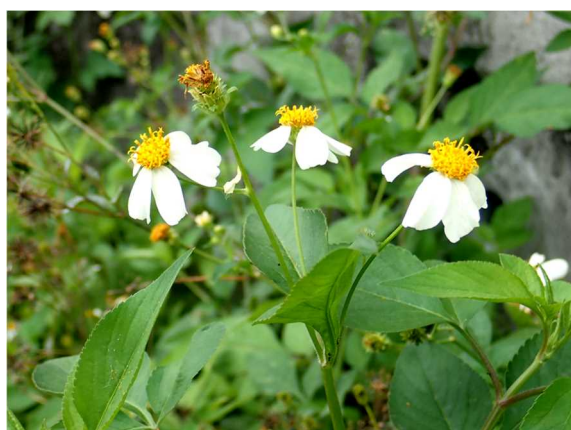


図4 オオバナノセンダングサ
(アワユキセンダングサ)

★詳しくは沖縄県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★
 TEL : (本所) 098-886-3880、(宮古駐在) 0980-73-2634、(八重山駐在) 0980-82-4933
 ホームページアドレス : <http://www.pref.okinawa.jp/site/norin/byogaichubojou/index.html>